Osaka University Knowledge Archive

Title	アイデンティティの形成過程と自己の意味・価値の探求
Author(s)	辰巳, 有紀子
Citation	生老病死の行動科学. 2004, 9, p. 67-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4577
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

アイデンティティの形成過程と自己の意味・価値の探求

（大阪大学大学院人間科学研究科博士課程）　辰　巳　有紀子

Abstract

This article critically reviews identity, which is based on self-concept and self-efficacy, from the perspective of a life-span-development. It is also discussed that existential questions and distress at considering the meanings and values of self through the process of identity forging. Finally, not only adolescents but also adults and terminal patients may have existential questions and distress, because their identity will not 'be completed' especially when critical life events happen. More empirical studies are needed.

key words：identity, forging process, meanings / values of self, existential question / distress

人間はひとりひとり自分なりの「自己意識（self-consciousness）」を持っており、人間の本質的な特徴はこの点にある（梶田, 1989）。同時に、こうした独自の「自己意識」の形成が、人間の尊厳の源である（梶田, 1989）。

自己関連の研究は数多く行われており、その中で様々な用語や概念が状況に応じて用いられている。Hattie（1992）はこれらの概念を整理し、自己関連用語は、「自己概念（self-concept）」に関する用語と「自尊感情（self-esteem: 自尊心ともいう）」に関連する用語とに分けられるとしている。自己概念は、人が自分自身を客体化したときに、自分自身に関して抱いている考えを指し、自己意識の客体的側面と言い換えることもできる（詫摩, 1978）。この自己概念と関連する用語として、自己（self）、自己像（self-image）、自己知覚（self-perception）などがあげられている。また、自尊感情に関連する用語には、自己受容（self-acceptance）、自己評価（self-evaluation）などが扱われている。

本論では、自己概念や自尊感情をもとに確立されていくといわれているアイデンティティ（identity: 自我同一性）に関する記述を生涯発達の観点から概観し、さらにアイデンティティ形成時に生じる自己の意味・価値の探求に関する問いや苦痛についてまとめる。

Ⅰ　自己概念の形成

1．自己概念の発達的変化と機能

自己概念は過去の行動や経験についての個人的評価を反映しており、現在の行動に影響を及ぼすような学習された行動パターンである（榎本, 1998）。幼少時において自己概念は行動にストレートに表れる単純なものであるが、青年期には内面的特徴を把握した形での自己概念の分化・統合へと発達的に変化し、安定化していく（榎本, 1998; 島袋, 1996）。

こうした変化を見せる自己概念の基本的な機能については、古くから多数の研究が行われている。Epstein（1973）はそれらをレビューし、自尊感情の機能は以下の 3 点に集約されると述べた。第一に個人の快と不快のバランスを生涯にわたって好ましい水準に維持し続けることができること、第二に、自尊感情を維持すること、第三に、経験から得られるデータを、次のときに効果的に対処できるような形に組織化し保存することである。

2．自己に対する評価的な認知と自尊感情

Epstein（1973）にみられるように、自尊感情は重要な概念であり、これに関する心理学的研究も数多く行われている。また、自尊感情に類似した概念で最も頻繁に用いられる用語に「自己評価」があるが（梶田, 1994）、榎本（1998）はこれらの概念を整理した（図1）。そこでは、自己には記述的側面と評価的側面があり、自己評価と自尊感情は自己についての評価的側面のことであるが、自尊感情は単なる自己評価よりも感情的で抽象的なものを指すとされている。

こうした自尊感情について、Steele（1988）は、人は自己の統合感や適合感を維持しようとするシステム、すなわちホメオスタシスを持っており、高い自尊感情そのものを求める傾向が

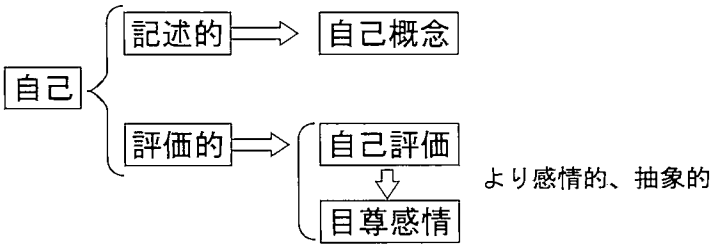

図1　自己への認知の仕組み（榎本, 1998）

あると述べている。また榎本（1998）は、自尊感情が人間の基本的欲求（Maslow, 1954）の中の「承認の欲求」に含まれるような人間にとって基本的な感情であると述べている。

また、高い自尊感情は、不安感を和らげ、対処能力を高め、身体的健康を促進すること（Baumeister, 1993）、ストレス対処能力の高さにつながること（榎本, 1998）といった機能を持つことが報告されている。逆に自尊感情が低い状態で推移する人は持続的にネガティブな感情を持つとされている（Kernis, 1993）。

これらのことから、人間の適応を考える上で自尊感情を考慮に入れることが重要であるといえる。

3．理想自己と現実自己

3-1. 自己不一致理論

前節では自尊感情が人間の適応を考える上で考慮すべき変数であることを結論づけたが、この自尊感情について、James（1892）は願望と成功の割合によって示されるという公式を提唱している。また Moretti & Higgins（1990）は、自尊感情とは「現実自己と願望（理想自己）の望ましい均衡」の上になりたつことを、個人差も考慮に入れた上で実証した。ここでいう現実自己とは、自己あるいは重要な他者が、その人物が実際に所有していると信じている属性についての本人による表象を指す。さらに理想自己は、自己あるいは重要な他者がその人物が所有すべきであると信じている属性についての本人による表象を指す（Moretti & Higgins, 1990）。

理想の自己像と現実の自己像の一致を適応状態とするとらえ方は、古くはパーソナリティ理論（personality theory : Rogers, 1951）や、アイデンティティ拡散との関連（砂田, 1979)、そして自己不一致理論（self-discrepancy theory: Higgins, 1987）として研究されてきた。これらの理論は、多くの精神療法家や臨床心理学者から支持を得ている（新井, 2001)。

しかし、新井（2001）が指摘するとおり、Rogers（1951）の理論も、Higgins（1987）の理論も、理想自己の概念には「なりたい自分」という接近したい自己像、すなわち正の理想自己しか含まれていないという欠点があった。これに対し、回避したい自己像、すなわち負の理想自己の存在も考慮すべきであると提唱したのがMarkus & Nurius（1986）である。同様に、遠藤（1992）も、正の理想自己と現実自己の差異だけでなく、負の理想自己と現実自己の差異と適応の関係について検討する必要があることを指摘している。その指摘を受け、正の理想自己と現実自己のズレを小さくしようとすることを接近システム、なりたくない自己とのズレを大きくしようとする動きを回避システムとして、近年、研究が進められている（榎本, 1998)。その中で、現実自己と、正の理想自己とのズレが小さいこと、および、負の理想自己とのズレが大きいことが、自尊感情との間に正の関係にあると指摘されている（新井, 2001)。

3-2. 理想自己を志向することと未来自己の予測

理想自己は人間の行動における指針となり、理想自己に向かっているという現在の自己の在り方は、未来自己の予測に肯定的な影響を与えている（水間, 2002)。ただし自己に対する過剰な意識を向ける結果になることから、理想自己の実現を追い求めすぎることは芳しくない（坂本, 1997)。よって、理想自己を志向することに価値がおかれるのは、水間（2002）も指摘しているとおり、自己意識の高まりとともに自らの存在を問い直し、自己を形成する過程においてであると考えられる。

Ⅱ 思春期・青年期における自己意識の高まりとアイデンティティの形成

1．青年期におけるアイデンティティ形成

人の生涯発達過程の中で、思春期は自己意識が急速に発達し、自己意識が先鋭化する時期であると位置づけられる（菅, 1994)。

次に続く青年期は、生物学的、社会・文化的成長をみせる一時期である（西平, 1995)。青年期後期（大学生相当）には、同年輩の異性との交際や職業選択といった発達課題とともに、アイデンティティ（自我同一性）の確立という自我意識に関する課題を抱えている（二宮, 1992)。

Erikson（1950）によると、アイデンティティとは、1.自分という人間は自分しかおらず、自分は一貫した存在として今日まで生き続けており，さらに今後もその延長上を生きるであろうという「一貫性の感覚」、2.1.の感覚の上に、自分という存在もしくは自分の生き方が、自分の生きているこの「社会によって是認」されているはずだという「意味・価値の感覚」を持つことである。そして人間はこうした二つの感覚を持ち、アイデンティティを確立して初めて安定感を持って生きていけるという（笠原, 1981)。

さらに、ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体を時間展望というが（都築, 1993)、一貫した時間展望の獲得こそが、青年期のアイデンティティ形成の重要な側面であるといわれている（都築, 1993; 島袋, 1996)。

2．成人期におけるアイデンティティの再体制化

ピアジェやフロイト、エリクソンが提唱した理論を含めた発達理論の多くが、成人期の発達を、それぞれのライフステージごとに特徴的な課題を持つ段階状の発達の形式をとるものとしてとらえてきた。それに対して岡本（1994）は、面接調査と質問紙調査に基づくそれまでの研究結果を総括し、人間は発達的危機に遭遇するたびに、アイデンティティの拡散と再体制化を繰り返し、より高いアイデンティティの達成に至るという、成人期におけるアイデンティティの「らせん式発達モデル」を提唱している（岡本, 1994, 2002a, 2002b; 図２）。このモデルでは、Marcia（1966）の提唱を採用し、危機の有無と自己投入（commitment）の有無を基準にし、アイデンティティを自我同一性達成、モラトリアム、 Foreclosure（早期完了／予定アイデンティティ／権威受容地位、自我同一性拡散）といった４つのステイタスに分類している。

またこのモデルでは、青年期でアイデンティティが一度達成地位に位置したとしても、それは二度と拡散しないわけではなく、流動的である（鑪, 1994）と考える。特に、中年期における体調の変化、時間的展望の狭まり、生産性における限界感の認識、老いと死への不安、定年退職期における定年退職といった危機的な事象を危機と認知することによって、人間は自らのアイデンティティを問い直す岐路に立つことがある。岡本（2002a）は、その危機をどのように認知し、対応するかによって、成人期にもアイデンティティ拡散やモラトリアム的状態の人々がかなりの割合で存在すると報告している。いいかえれば、成人期以降も、危機的なライフイベントによってアイデンティティが拡散し得ると考えている。同様に Kroger & Green（1996）は、中年期の男女に対する調査から、「危機的なライフイベント」はアイデンティティ・ステイタスが変化するきっかけの一つとして見出されたと報告している。

さらに岡本（1994）は、成人において危機によって拡散したアイデンティティが再体制化す

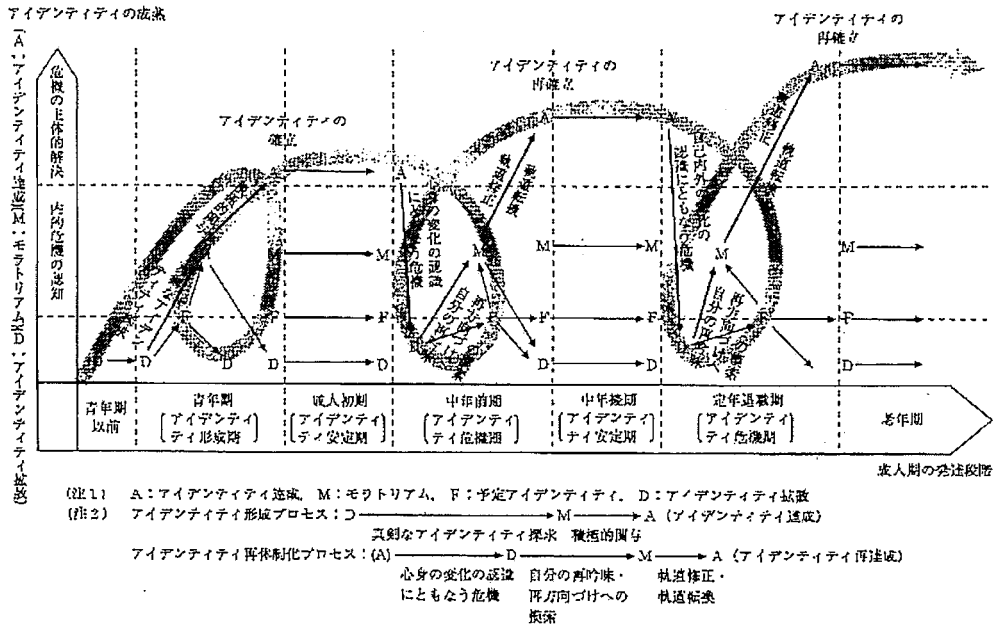

図２　自我同一性のらせん式発達モデル（岡本, 2002b）*

*出版社より転載許可

る過程は、青年がアイデンティティ探求によりモラトリアムを経験し、1つの方向を選択してそれに積極的に関与することで、アイデンティティの達成にいたるアイデンティティ形成過程（Marcia, 1966）と非常に類似した特質を持っていると述べている。

Ⅲ アイデンティティ形成過程に生じる実存的苦痛

1．青年期における自分の意味・価値の探求と実存的苦痛

Erikson（1950）によるアイデンティティの定義の「意味・価値の感覚」とは、社会の中での自分の価値や意味を確認することである。幼児期に徐々に自己と他者とを区別して認識できるようになり、やがて思春期や青年期には他者の眼差しに敏感に反応し、自分に対する意識が先鋭化するようになる。そして、他者の中で自分を位置づけていくが、その際「自分とは何か」、「何のために生き、何のために死んでいくのか」といった生きる意味や価値に関する実存的な問いを自らに向ける（Adamson & Lyxell, 1996; 菅, 1994）。こうした問いに対し、肯定的かつ確信的に回答できることがアイデンティティの確立を示す重要な要素であることが、臨床家によって指摘されている（菅, 1994）。

それにも関わらず現代の日本では多くの人が、自己の存在の意味・目的意識を持つことができておらず（佐藤, 1998）、実存的なむなしさや不安感といった漠然とした気分を抱いているといわれている（堤, 1994）。自分がなぜここに存在し、何のために生きているのか、人生の意味は何か、ひいてはなぜ死ぬ運命にあるのか、人間とはいったい何なのか。そうした根本的な問いを自分や他者に投げかけてみるものの、簡単には答えは得られず居心地が悪い。

これらのことから、「自己の存在そのものや自己の在り方、自己の意味・価値を確信できないときや揺らいだとき，そしてこれまで当然としてきた価値体系が根底から揺らいだとき」には耐え難い苦痛が生じると考えられる。

このような「実存的な自己の意味や価値を探索する際に答えを見出せないときに生じる苦痛」を、本論では「実存的苦痛（existential distress）」と操作的に定義する。

2．成人期における実存的苦痛

成人期のアイデンティティ・クライシス後の再体制化過程が青年期のアイデンティティ形成過程と類似していることは既に述べた。このことから、成人期のアイデンティティ再体制化過程においても、青年期と同じく実存的な問いを生じ、問いへの答えが見つからない場合にやはり実存的苦痛を感じ得ることが推察される。

成人の実存的苦痛については、欧米では宗教的側面を含めたより広い概念である霊的苦痛（spiritual pain）という観点から研究がなされている。同様に、日本でも霊的苦痛に関する論文や刊行物が、末期医療に携わる医療従事者によって数多く出版されている。その中で霊的苦痛は、「自己の人生や存在の意味への問い」（柏木, 2000; 川瀬, 2003; 村田, 2000; Twycross, 1997）、「価値観・信念の揺らぎ」（柏木, 2000; 川瀬, 2003; Twycross, 1997）、「絶望感」（岩田・志真, 2000; Twycross, 1997; Morita, Tsunoda, Inoue, & Chihara, 2000）、「孤独感」（岩田・志真, 2000）、「低い自尊感情」（Morita, et al., 2000）、「自律性の喪失」（Morita, et al., 2000）、「現在の生活の無意味さ」（Morita, et al., 2000）などの要素を含む概念であるとされている。

3．今後の課題

本論では実存的苦痛を「実存的な自己の意味や価値を探索する際に答えを見出せないときに生じる苦痛」と操作的に定義した。今後は、この実存的苦痛と、2で述べた研究の中で扱われている実存的苦痛が同様の性質を持つかという点を確認するための実証的研究が求められる。また、実存的な問いがアイデンティティ形成過程において生じるといわれていることを鑑みると、実存的苦痛について今後アイデンティティの観点から研究を行うことも有効ではないかと考えられる。

ただし、特に末期がん患者においては青年期と異なり、未来自己についての決して明るくない見通しや予測が存在する。ネガティブな未来イメージしか持てないことが、アイデンティティ拡散状態と深い関連があるという指摘がある（都築, 1993)。不死の信念（symbolic immortality: Florian & Mikulincer, 1998; Lifton, 1973; Neimeyer & Van Brunt, 1995; O'Dowd, 1984; review: Tomer, 1992）の存在は高齢者の見通しを変化させるといわれているが、そうした特定の信念を持たない限り、楽観的な時間展望を抱くことが難しい。そのため、高齢者や末期患者の実存的苦痛はより深く苦しいものである可能性があるが、実証的研究は十分でなく、今後のさらなる研究が求められる。

引用文献

Adamson, L. & Lyxell, B. 1996 Self -concept and questions of life: identity development during lete adolescence. *Journal of Adolescence,* **19**, 569-582.

新井幸子　2001　理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響　心理学研究, **72**, 315-321.

Baumeister, R. F.　1993　Understanding the inner nature of low self-esteem: Uncertain, fragile, protective, and conflicted. In R. F. Baumeister (Ed.), *Self-esteem: The puzzle of low self-regard,* 201-218. New York: Plenum.

遠藤由美　1992　自己評価基準としての負の理想自己　心理学研究, **63**, 214-217.

榎本博明　1998　「自己」の心理学－自分探しへの誘い－. サイエンス社.

Epstein, S.　1973　The self-concept revisited or a theory of a theory. *American Psychologist,* **28**, 405-416.

Erikson, E. H.　1950　*Childhood and society.* New York: W. W. Norton.（仁科弥生訳　1977　幼児期と社会　みすず書房）

Erikson, E. H.　1959　Identity and the life cycle. International University Press.（小此木啓吾訳編　1975　自我同一性　誠信書房）

Florian, V. & Mikulincer, M.　1998　Symbolic immortality and the management of the terror of death: The moderating role of attachment style. *Journal of Personality and Social Psychology,* **74**, 725-734.

Frankl, V. E. 著　霜山徳爾 訳　1961　夜と霧　みすず書房.

Hattie, J.　1992　*Self-concept.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Higgins, E. T.　1987　Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review,* **94**, 319-340.

岩田広香・志真泰夫　2000　スピリチュアルペインを診断していますか　今日の緩和医療, **2**,

14-15.
James, W. 1892 Psychology: Brief course.（今田寛訳 1993 心理学 上・下. 岩波書店.）
梶田叡一 1989 自己意識の発達過程 梶田叡一（編） 自己意識の発達心理学 金子書房. 第1章（p.1-32）.
笠原嘉 1981 不安の病理 岩波新書.
柏木哲夫 2000 スピリチュアルペインとは 今日の緩和医療, 2, 12-13.
川瀬洋子 白衣を脱いだ普段の自分で （社）日本看護協会（編） 緩和ケアナース養成研修報告書－神戸編－ 日本財団電子図書館
http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1998/00012/contents/065.htm（2003.11.29.現在）
Kernis, M. H. 1993 The roles of stability and level of self-esteem in psychological functioning. In R. F. Baumeister (Ed.), *Self-esteem: The puzzle of low self-regard,* 167-182. New York: Plenum.
Kroger, J. & Green, K. 1996 Events associated with identity status change. *Journal of Adolescence,* 19, 477-490.
Lifton, R. J. 1973 The sense of immortality. On death and the continuity of life. *American Journal of Psychoanalysis,* 33, 3-15
Marcia, J. M. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,* 3, 551-558.
Markus, H. & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist,* 41, 954-969.
Maslow, A. H. 1954 *Motivation and personality. Harper & Row.* 小口忠彦監訳 *1971* 人間性の心理学 産業能率大学出版部.
水間玲子 *2002* 理想自己を志向することの意味－その肯定性と否定性について－ 青年心理学研究, 14, 21-39.
Moretti, M. M. & Higgins, E. T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology,* 26, 108-123.
Morita, T., Tsunoda, J., Inoue, S., & Chihara, S. 2000 An exploratory factor analysis of existential suffering in Japanese Terminally ill cancer patients. *Psycho-Oncology,* 9, 164-168.
村田久行 2000 スピリチュアルペインの心理学的考察 今日の緩和医療, 2, 18-19.
二宮克美 1992 同一性の危機 子安増生（編） キーワードコレクション発達心理学 新曜社 第五章（青年期）.
西平直喜 1995 青年期 岡本夏木・清水御代明・村井潤一（監修） 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房.
Neimeyer, R. & Van Brunt. 1995 *Death Anxiety Handbook 3rd ed.: Research, Instrumentation, and Application.* Taylor & Francis, 49-58.
O'Dowd, W. 1984 Locus of control and level of conflict as correlates of immortality orientation. *OMEGA,* 15, 25-35.
岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.

岡本祐子　2002a　日本におけるアイデンティティ研究の展望　鑪幹八郎・岡本祐子・宮下一博（編）　アイデンティティ研究の展望Ⅵ．　ナカニシヤ出版（京都府）　第Ⅳ章．
岡本祐子　2002b　中年のアイデンティティ危機をキャリア発達に生かす?個としての自分・かかわりの中での自分　*Finansurance,* **10**, 15-24.
大野久　1995　青年期の自己意識と生き方　落合良行・楠見孝（責任編集）　講座　生涯発達心理学　第４巻　自己への問い直し－青年期－　金子書房．第４章，89-123.
Rogers, C. R.　1951　*Client-centered therapy.*　Boston: Houghton Mifflin. 畠瀬稔・阿部八郎（編・訳）　1964　来談者中心療法－その発展と現況－　岩崎書店.
坂本真士　1997　自己注目と抑うつの社会心理学　東京大学出版会.
佐藤文子　1998　PIL テストの理論的背景　佐藤文子（監修）PIL テストハンドブック第Ⅰ部　PIL テストの全体像と分析法　システムパブリカ．第１章.
島袋恒男　1996　自己概念の発達　前原武子（編）　生涯発達　ナカニシヤ出版．第４章（p.40-55）.
Steele, C. M.　1988　The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. *Advance in Experimental Social Psychology,* **21**, 261-302.
砂田良一　1979　自己像との関係性からみた自我同一性　教育心理学研究，**27**，215-222.
菅佐和子　1994　思春期とアイデンティティ　鑪幹八郎・山下格（編）こころの科学 53　アイデンティティ　日本評論社．p.41-51.
杉山成　1994　時間次元における諸自己像の関連性と自我同一性レヴェル　教育心理学研究，**42**，209-215.
詫摩武俊　1978　自己概念とは何か　東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保（編集代表）　心理用語の基礎知識　有斐閣ブックス.
鑪幹八郎　1994　アイデンティティとは何か（対談）　鑪幹八郎・山下格（編）こころの科学 53　アイデンティティ　日本評論社．p.41-51.
Tomer, A.　1992　Death anxiety in adult life-theoretical perspectives.　*Death Studies,* **16**, 475-506.
堤雅雄　1994　むなしさ-青年期の実存的空虚感に関する発達的一研究　社会心理学研究，**10**，95-103.
都築学　1993　大学生におけるアイデンティティと時間的展望　教育心理学研究，**41**，40-48.
Twycross, R.　1997　*Introducing Palliative Care (2nd).* Radcliffe Medical Press, Oxford and New York, 53-81.